



## まちじゅうアート



表紙絵：鵜沢大地 Daichi Uzawa 「大地数字」木製パネルにマーカー、約 400mm×400mm

【主催】 静岡県 スポーツ・文化観光部 文化局文化政策課  
静岡県

npo  art connect shizuoka

特定非営利活動法人 アートコネクトしづおか

〒420-0858 静岡市葵区伝馬町8-10 藤江学園ビルB1F

TEL: 054-204-0320 (遠藤)

E-mail: info@artconnect-s.com URL: <http://artconnect-s.com/>



発行：2021年12月

デザイン・制作：遠藤次郎 Assistant: 保崎一乃



*machiju.art*

まちじゅうアート作品集



松永きよみ Kiyomi Matsunaga 「赤富士」紙にマーカー・ペン、420mm×594mm



## ごあいさつ

静岡県知事  
**川勝 平太** Heita Kawakatsu

静岡県では、障害のある人の文化芸術活動への理解促進や障害のある人の社会参加、創作意欲の向上、経済的な自立を促進するため、障害のある人が制作したアート作品を企業・店舗等に有償で貸し出し、レンタル料の一部を作作者に還元する事業である「まちじゅうアート」を推進しています。

障害のある人のアート作品は、非常に色彩が豊かです。固定観念にとらわれず、描くことを純粋に楽しんでいることが伝わり、鑑賞するとエネルギーがあふれてくるところが作品の魅力であると感じています。

本冊子では、まちじゅうアートでレンタルすることができるアート作品を数多く掲載しております。

御覧いただきました皆様におかれましては、障害のある人のアート作品の魅力を存分に御堪能いただき、ぜひ、まちじゅうアートを御活用いただければ幸いです。



# まちじゅうアート

## コンセプト

静岡県下のみならず全国には、障害があっても創造的で魅力のある活動をしている方、そしてその活動を支えている方がたくさんいらっしゃいます。

しかし残念ながら、障害のある作家の活動や魅力はあまり一般には知られておらず、人々が目にすることなく埋もれてしまっていることが多いのが現状です。

障害のある作家たちの無限に広がる表現の世界は、まさにファインアート。何ものにもとらわれない自由で無垢な表現スタイルは、ユニークであると同時に驚きと感動に満ちています。

一体、障害のある作家の魅力はどこにあるのでしょうか。美術表現は自由で広大であるが故に、作品鑑賞に迷いが生じることもあります。

そこでこの冊子では、静岡県下で活動する数多くの作家や作品の中から数十点を選出し、文化芸術の分野で幅広く活躍する著名な方々に作品の魅力を語っていただきました。ぜひ参考にしていただければと思います。

障害のある作家たちの生み出す素晴らしい表現の世界は、きっと元気と勇気を与えてくれることでしょう。私たちは一人でも多くの方に障害のある作家の魅力をお届けし、ファンになっていただけたらと願っています。



## 事業概要

障害のある人のアートの魅力を伝え、ファンとなる企業(個人)を探して作家と繋ぎ、広く社会にアピールします。

障害のある作家のアートを飾りたい、利用したいという企業(個人)を探してアート作品の設置や利用の仲介・コーディネートを行い、作家と企業(個人)・社会を繋ぎます。作家と作品の魅力や素晴らしさを伝えて社会参加の機会を創出し、広く社会にアピールしていきます。

### 静岡県内のアート作家を探します。

企業等のニーズに合わせて御紹介できるよう、静岡県内各地域の作家のもとを訪問し、作家(所属事業所)との信頼関係を大切に築きながら作家と作品を紹介していく活動を行います。

### 作品をアーカイブ化し、未来に向けて活用できるようにします。

作家(所属事業所)情報や作品をアーカイブ化(記録を保存・活用し未来に伝達すること)し、ホームページやSNS、インターネットで作家・作品、所属事業所情報等を紹介し伝えていきます。(希望する方のみ)

### 作家(家族・所属事業所)、企業とのアート契約を制度化します。

あいまいになりがちなアートの賃借、売買等に関する契約を作家(所属事業所)や企業と取り交わすこと、きちんとした制度を確立していくようにします。

### 障害のある人がアート活動で社会参加ができる機会を創出します。

作家が作品を制作することに喜びを持つことができるよう、作品提供に際して収入を得られる仕組みをつくります。これにより障害のある人がアート活動で社会参加ができる機会を創出します。



特定非営利活動法人ひまわり事業団 就労継続支援 B型事業所 そいゆ施設内にて



山口 健太 Kenta Yamaguchi 「健太式」紙に鉛筆、約 2500mm×900mm

## INDEX

- ごあいさつ 静岡県知事 川勝 平太 Heita Kawakatsu  
p1
- まちじゅうアートコンセプト・事業概要  
p3
- もくじ  
p5
- 推薦作品と推薦者コメント  
p7
  - 木下 直之 Naoyuki Kinoshita
  - 日比野 克彦 Katsuhiko Hibino
  - 中津川 浩章 Hiroaki Nakatsugawa
  - 小澤 慶介 Keisuke Ozawa
  - 櫛野 展正 Nobumasa Kushino
- アート作品ファイル  
p17



## 楽しい床屋さん

カレンダーの裏紙にマーカー  
297mm×420mm

## 松井 久悦 Hisayoshi Matsui

1998年生まれ。菊川市在住。

小学校2年生の時に手首の硬さを補う目的で始めた「円を描く」という訓練がきっかけとなり、絵描き歌で楽しさを知り、絵を描くようになった。その後、言葉ではうまく伝えられない出来事を伝えるため、広告チラシの裏面にマーカーで絵を描き始めた。彼にとって「描くこと」とは日常に起った出来事を家族へ伝えるための手段となっている。ツルツルした広告やカレンダーの裏面に描くことを好み、時に3~4枚の絵を同時に描くこともある。

現在も「日常」を思うがままに、独自の視点で描き続けている。



## 木下 直之

Naoyuki Kinoshita

静岡県立美術館館長、神奈川大学教授、東京大学名誉教授

1954年浜松市生まれ。東京藝術大学大学院修士課程中退。兵庫県立近代美術館学芸員、東京大学総合研究博物館をへて、東京大学大学院教授(文化資源学)。現在は静岡県立美術館館長。

近代日本美術を中心に、写真、建築、記念碑、銅像、祭礼、見世物など社会や国家にかかわる表現、物質文化全般について幅広く研究を行う。

忘れられたもの、消えゆくものなどを通して日本の近代について考えてきた。2015年春の紫綬褒章、2017年中日文化賞。

絵を前にして、実は誰もがいろいろな見方をしています。瞬間に見る、というよりも、絵の方から飛び込んで来ることもある。立ち止まってじっくりと見る、繰り返し見る、という具合にです。美術館などから提供される情報に縛られないために、瞬間に見ることをお勧めします。あまり考えない。何かが残る。それは何だったのかと思い返すことも絵を見る楽しみです。松井久悦さんの絵には強い残像がありました。珍しく室内を描いているからです。遠くから風景を眺めているのでも、外国の珍しい建物に惹かれたのでもない。日々の暮らしの中で気になった光景を描いている。そこに松井さんがいるという感じが伝わってきます。知的障害のある人の絵では、あふれるばかりの色彩がかたちを凌駕することが多いのですが、松井さんの絵は色がかたちと拮抗している。おそらく、松井さんは横縞が好きなのですね。床屋の赤・黄・青のねじり棒が絵の中できりりと効いています。

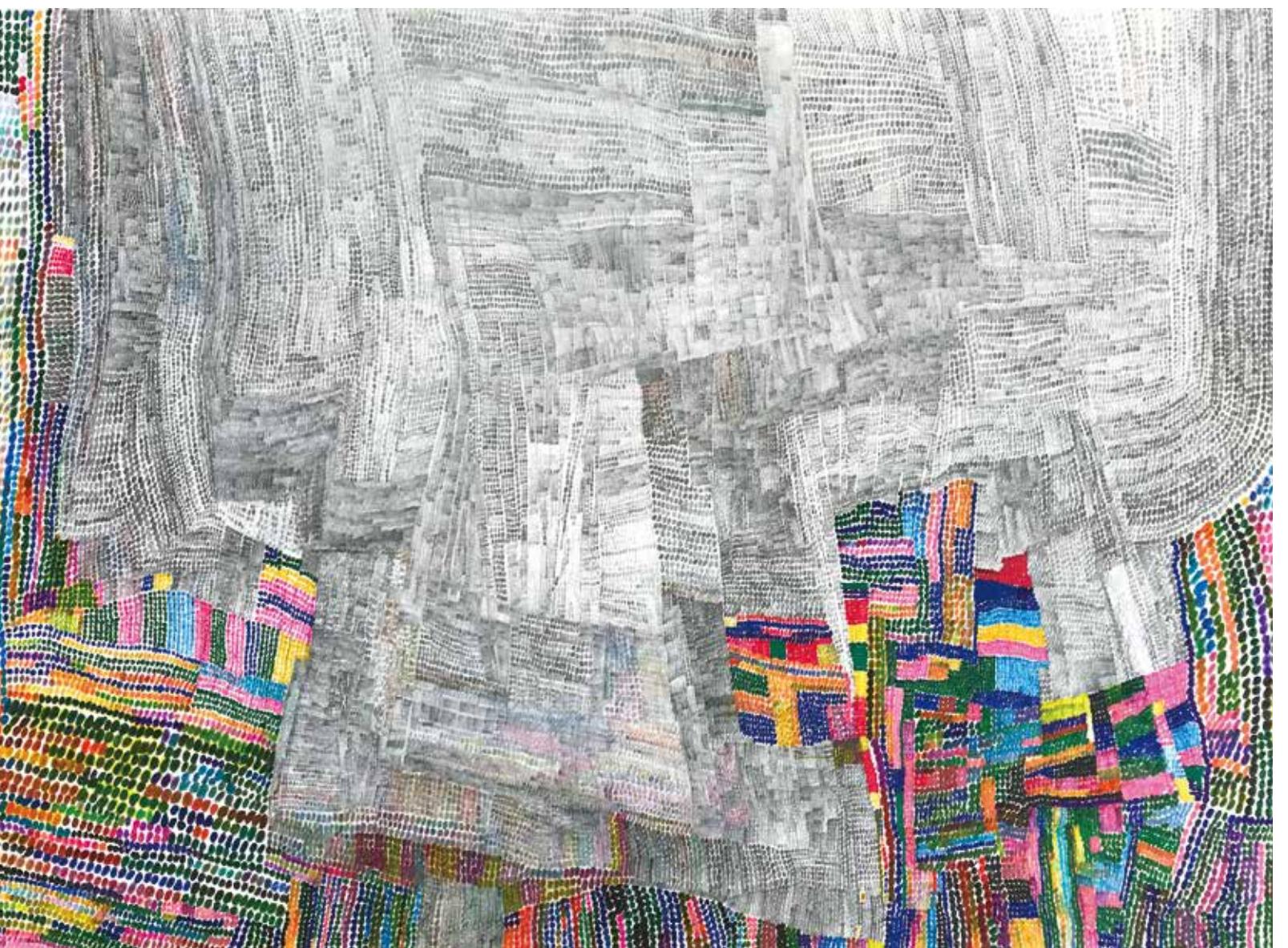
## 作者その他の作品



「おばあちゃんの背中」紙にマーカー  
210mm×297mm



「安倍川と富士山」紙にマーカー  
297mm×420mm



## 草原の灯り

紙に鉛筆・ペン  
728mm×1030mm

## 大島 正年 Masatoshi Oshima

1968年生まれ。熱海市出身。社会福祉法人見晴学園所属。  
1997年より入所利用を開始し、25年目を迎える。事業所が絵画療法を展開し始めた当初から療法メンバーとして作品制作を行ってきた。当初から、抽象画を中心に行くことが多かった。現在の画法は2015年頃からであり、色の濃さの違う鉛筆を提供した事がきっかけであった。鉛筆から色鉛筆・マーカーなど様々な画材を使用することで、よりオリジナリティの高い作品を制作することを目標に、日々の絵画療法に取り組んでいる。



日比野 克彦 Katsuhiko Hibino

アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授。岐阜県美術館館長。熊本市現代美術館館長。日本サッカー協会理事、社会貢献委員会委員長。1958年日本・岐阜県生まれ。1984年東京藝術大学大学院修了。1982年日本グラフィック展大賞受賞。1986年シドニービエンナーレ参加。1995年ベネチアビエンナーレ参加。2003年~越後妻有アートトリエンナーレ参加。2010年~瀬戸内国際芸術祭参加。2013~15年六本木アートナイト、アーティスティックディレクター。平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。2014年~アートで社会的課題に取り組み多様性のある社会を創造するTURNプロジェクトを展開中。

夢中になるって言うけれど、それは本人の言葉ではない、周りから見た人が、現実的な世界と遮断して違う世界にいる人の様子を言う。  
当の本人にとっては夢の中ではなく現実的な世界である。現実的な世界は一人の人間に対してひとつとは限らない。夢中になる世界を持っている人は普通は二つ以上の世界がある。  
二つ以上世界を持っている人は生きることに対して強い時と困る時がある。  
自身でその二つの世界の出入りの入口と出口の行き方を知っている人は生きる力が強くなる。  
しかし、その行き方がわからないと、ひとつの世界しか持たないことと同じことになり、生きることが混乱する時がある。社会は絶えず変化する。朝と夜があるように、晴れたり曇ったり、騒がしかったり静かだったり、嬉しかったり、悲しかったり、好きな人がいたり、いなかったり、大切な人が出来たり、いなくなったり。お腹がへったり、膨れたり。いつもユラユラゆれているのが社会だから、そんな中で生きるのには、自分の中にも二つ以上の世界があって、その二つの世界を行ったり来たりできるのがいい。

## 作者その他の作品



「桜」紙に鉛筆・ペン  
728mm×1030mm



「春」紙にペン・水彩絵具・色鉛筆  
728mm×1030mm



## 鳥と見た風景

紙にマーカー  
728mm×1030mm

### 山田 悅久 Yoshihisa Yamada

1976年生まれ。菊川市出身。就労継続支援事業所B型利用。

聴覚障害と自閉症を患いながらも簡単な手話と筆談、ジェスチャーでコミュニケーションを取っている。30歳の時から事業所の絵画クラブに参加して絵を描くことの楽しさを知った。発色の良いマーカーを使って全紙サイズの紙に描く。同じモチーフを同じ構図で気が済むまで何枚も何枚も描き続けることが多い。伴走者である支援員が作家に創作意欲のわく素材を提示し、選択してもらうことで画風と表現に広がりが出てきた。現在では「絵を描くこと」が生活の中で一番の喜びとなっている。



中津川 浩章 Hiroaki Nakatsugawa

アーティスト／アートディレクター 表現活動研究所ラスコ代表  
1958年静岡県生まれ。作品制作および多様な分野で社会とアートをつなぐ活動をおこなう。表現活動ワークショップ、パリアフリー・アートスタジオ、美術史WS、講演等で表現することの意味と大切さを伝えている。障害者のためのアートスタジオディレクション、展覧会企画・プロデュース、キュレーション、選考委員など多数務める。

「岡本太郎とアールプリユット」(川崎市岡本太郎美術館)、「about me～わたしを知って～」「ビッグ・アイアートプロジェクト」(国際障害者交流センター)、「埼玉県障害者アート企画展」、日本財団DIVERSITY in the ARTS 公募展、Art to you! 東北障がい者芸術全国公募展、宮崎県国文祭・芸文祭障がい者アート展ほか。

NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事、認定NPO法人アール・ド・ヴィーヴル理事、一般社団法人Art Inter Mix代表、一般社団法人Get in touch 理事。

「まちじゅうアート」プロジェクトで初めて山田悦久さんの作品を見た。自然と体がリラックスして思わず笑みがこぼれる。あたたかくほのぼのとした感覚に包まれる絵だ。

ユーモラスに抽象化されたな建物やまち並み、鳥の目線で眺める垂直な構図、動物や植物たちの愛らしく柔らかな存在感。流れているゆったりとした速度感が心地よい。

カラフルで装飾的な窓や扉がならんだ伸びやかな空間は、ウィーンの画家・建築家ファンデルトワッサーを彷彿とさせる。

表現されたものに向き合うとき必要なのは、正解をさがす解釈や美術史の知識ではない。「感じること」に率直に正直になることだ。理屈や正解でがんじがらめになった感性をゆるやかに溶かしてくれる力がアートにある。みずみずしい感性を共有できた時、見ている自分自身の人生もまた豊穣になっていくだろう。

このプロジェクトによって作品がたくさんの人と出会い、障害特性への理解を深め、地域に新たな関係を築くことができたなら、互いに得るもののが豊かにあるはずだ。この試みを応援したいと思う。

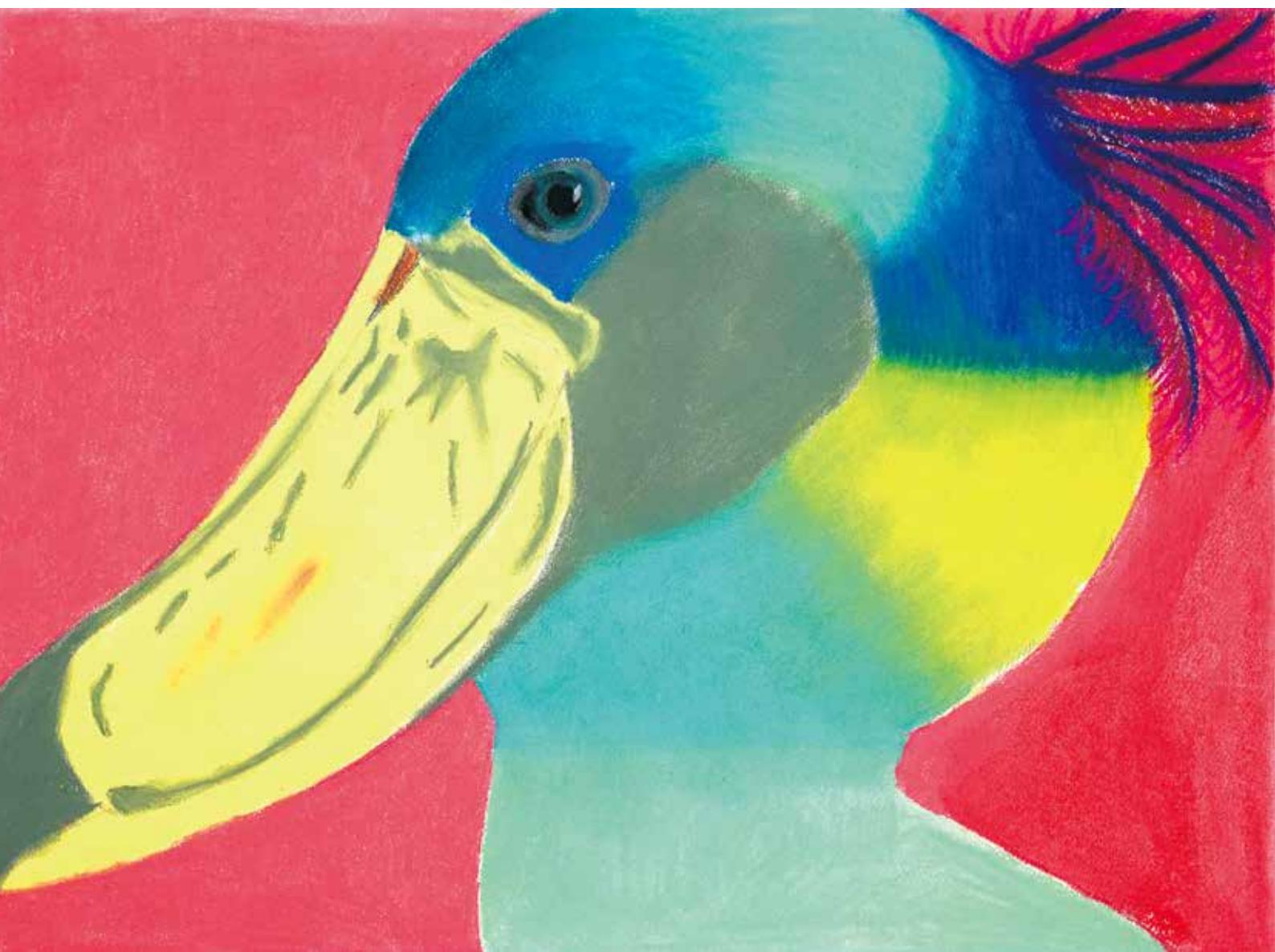
### 作者その他の作品



「建物のある風景」紙にマーカー・ペン  
728mm×1030mm



「町並み」紙にマーカー・ペン  
728mm×1030mm



ハシビロコウ

紙にパステル  
515mm×728mm

櫻井 陽菜 Hina Sakurai

2001年生まれ。藤枝市出身。  
2020年よりwaC(ワンダフル・アート・コミュニティ)所属。特別支援学校時代から美術表現の才能を発揮。物静か故に大人しく控えめな印象を与えるが、静かに淡々と描かれる表現には強いメッセージ性を含むこともある。水彩絵具からパステルまで自在に使い分け、風景から動物表現まで独特な世界感で描いていく。地道に積み上げられる力と幻想的な表現力が彼女の持ち味となっている。



小澤 慶介 Keisuke Ozawa

一般社団法人アート代表理事、インディペンデント・キュレーター  
2016年に現代アートの学校「アートスクール」(東京、清澄白河)を設立したほか、これまでに「六本木クロッシング2016展 僕の身体、あなたの声」(森美術館、2016年)において共同キュレーター、また「富士の山ビエンナーレ2016フジヤマ・タイムマシン」および「富士の山ビエンナーレ2018スルガノミライ」においてディレクターを務めるなど、現代アートの教育や展覧会事業に数多く携わっている。現在、茨城県守谷市を拠点とするアーティスト・イン・レジデンス事業アーカスプロジェクトのディレクターおよび法政大学兼任講師を兼務している。

櫻井さんの《ハシビロコウ》が一目で好きになった。  
はじめはなぜかわからなかったが、しばらく見ているとその理由がはっきりしてくる。  
まず、大胆なモチーフの切り取りがすごい。櫻井さんは、その珍しい鳥の全体像ではなく、左側からぐっと寄って、胴体ばかりか嘴や頭の先を画面の外へ押し出して描いている。  
これは、絵画よりも、クローズアップといった映像でよく見る描写方法だ。  
それによる思い切った画面構成に驚かされる。  
そして、画面を色で大きく分割していることも特徴的だ。背景の赤と鳥の緑は、お互いの色を引き立たせている。色の面は大きく、それらの対比が鮮明なので、鳥の具体的な形と同じくらいに色の面の構成が際立ってくる。それはまるで、具象と抽象がぎりぎりの緊張感を保ちながら同時に画面に収まっているかのようだ。  
そうやって生まれた《ハシビロコウ》は、こちらをじっと見ている。  
この鳥から、しばらく目が離せそうにない。

作者その他の作品



「青いライオン」紙にパステル・色鉛筆  
364mm×515mm



「オカメインコ」紙にパステル  
515mm×364mm



オオハシ

紙にペン・マーカー  
515mm×364mm

## 増田 亮太

Ryota Masuda

1995年生まれ。牧之原市在住。

特別支援学校の美術部に入部した時から描くことに樂しみを感じ、モチーフから感じた線の動きや光の変化を独特な表現で描き始めた。特別支援学校卒業後にwaC(ワンドフル・アート・コミュニティ)に参加。信頼できる人や仲間から描く樂しみを感じ、自身の表現を模索。艶やかでダイナミックな構図と躍動感、彼独自の輝く虹色の発光表現が絢爛な世界を創り出している。



櫛野 展正  
Nobumasa Kushino

アーツカウンシルしづおか チーフプログラム・ディレクター  
クシノテラス主宰  
2000年より知的障害者福祉施設で介護福祉士として働きながら、2012年より広島県福山市鞆の浦にある「鞆の津ミュージアム」でキュレーターを担当。2016年4月からは、アウトサイダー・アート専門スペース「クシノテラス」オープンのため独立。表現せずにいる人たちに焦点を当て、全国各地で取材を続けながら執筆や展覧会の企画などを行う。  
著書に『アウトサイド・ジャパン 日本のアウトサイダー・アート』(イースト・プレス)、『アウトサイドで生きている』(タバブックス)など。

マーカーやパステルなど使用する画材が変わっても、「これは誰が描いたものだ」とすぐに認識できること。

仮にそれを「画風」と呼ぶのだとしたら、1995年生まれの若い増田亮太さんは既に自分だけのスタイルを確立しているようです。

その作品の特徴はなんと言っても、大胆な構図と色彩の豊かさにあります。

たとえば、日本では虹は一般的に7色と認識されていますが、南アジアのバイガ族は虹の色を2色、アフリカのアル部族は8色と捉えているなど、国や文化の違いによって物ごとの認知の方法はさまざまです。

そのように考えていくと、増田さんは事物を多様な色彩を伴った実体として認識しているようさえ感じてしまいます。

増田さんが描く豊かな色彩の絵画は、凝り固まった僕らの常識を鮮やかに解きほぐしてくれる存在なのかも知れません。

## 作者その他の作品



「クロコダイル」紙にパステル  
364mm×515mm



「フクロウ」紙にペン・マーカー・水彩絵具  
515mm×364mm

## アート作品ファイル

ART Work file



赤池 優也 Ryouya Akaike 「牛」紙にアクリル・オイルパステル、841mm×594mm



久保田 重好 Shigeyoshi Kubota  
「本能」紙にペン・マーカー・水彩絵具  
515mm×728mm



吉村 松子 Matsuko Yoshimura  
「ワンダーランド」紙にパステル  
728mm×1030mm



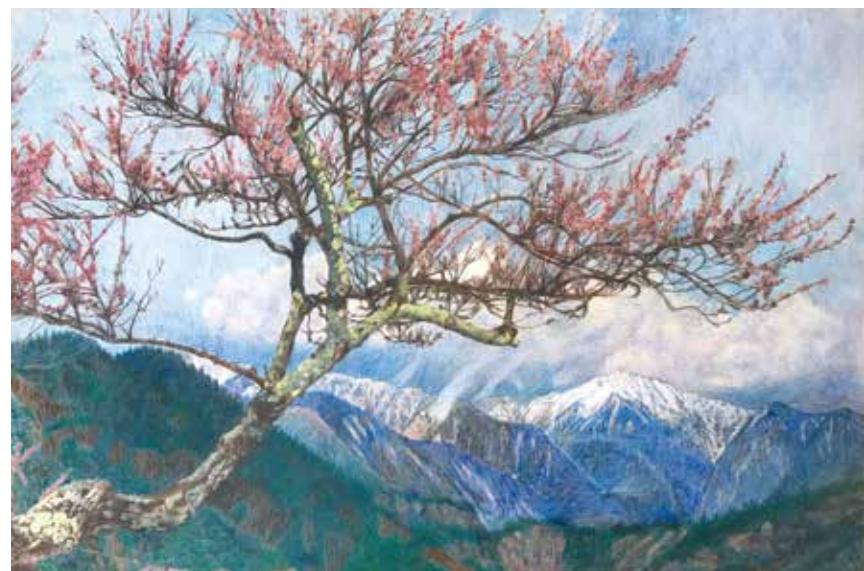
市川 文男 Fumio Ichikawa  
「トラ」紙に水彩絵具  
728mm×1030mm



鈴木 あさ子 Asako Suzuki  
「港のある外国の街並み」紙にパステル  
728mm×1030mm



井上 義明 Yoshiaki Inoue  
井上 義治 Yoshiharu Inoue  
「四季」紙にペン・マーカー・水彩絵具  
728mm×1030mm



田代 源一郎 Genichiro Tashiro  
「早春の桜」紙に色鉛筆  
728mm×1030mm



長田 尚 Hisashi Osada  
「地球の祈り」紙に水彩絵具  
728mm×1030mm



永井 貴治 Takaharu Nagai  
「街並み」紙にマーカー・ペン・水彩絵具  
728mm×1030mm

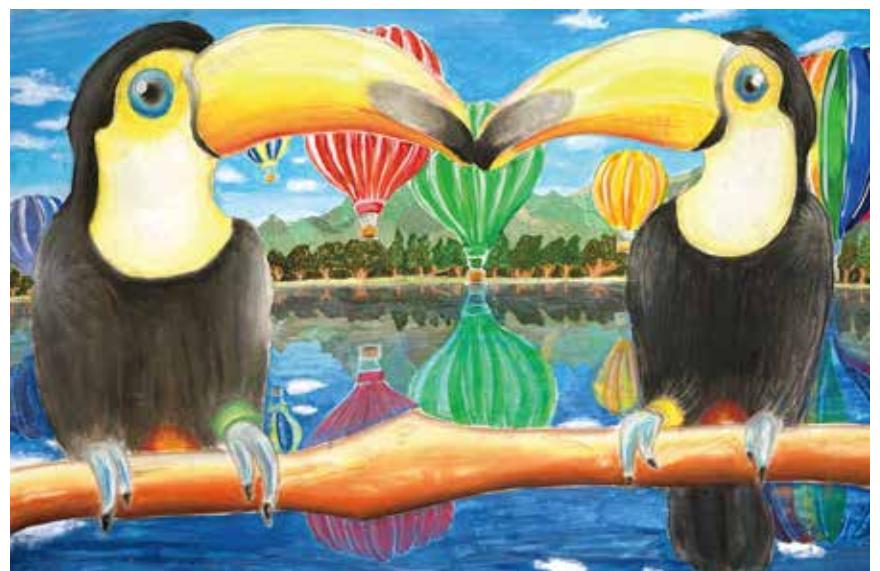


「青い顔のオットセイ」  
紙に水彩絵具  
182mm×257mm  
「ネコの兄弟」紙に鉛筆・水彩絵具  
182mm×257mm  
「草をはむぶた」紙に鉛筆・オイルパステル  
182mm×257mm  
「こうのとり」紙に鉛筆・マーカー

土屋 瑠衛 Rui Tsuchiya  
「こうのとり」紙に鉛筆・マーカー  
182mm×257mm



大石 理央 Rio Oishi  
「シシリーア島」紙にペン・色鉛筆  
515mm×728mm



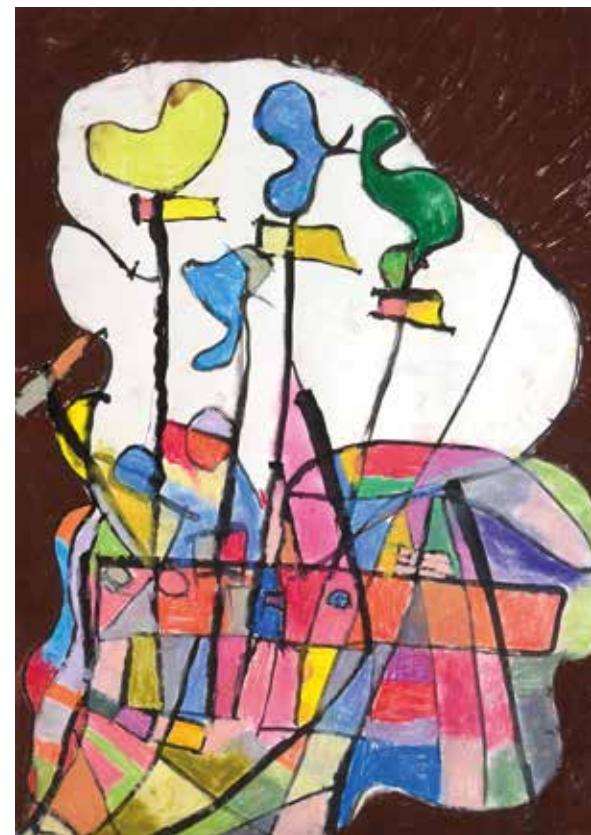
提坂 帆乃夏 Honoka Sagesaka  
「シンメトリーのオオハシ」紙に水彩絵具  
364mm×515mm



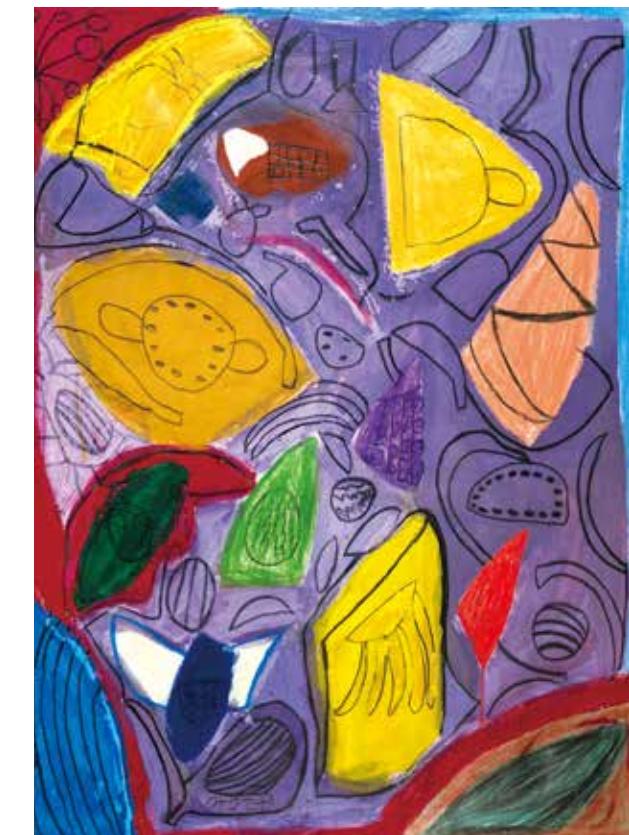
天野 嘉人 Yoshito Amano  
「カラフルなシマウマ」紙に墨汁・マーカー  
364mm×515mm



田中 拓実 Takumi Tanaka 「超密」紙にペン・色鉛筆、364mm×515mm



高井 美幸 Miyuki Takai  
「ゴルフバック」紙に墨汁・パステル  
728mm×515mm



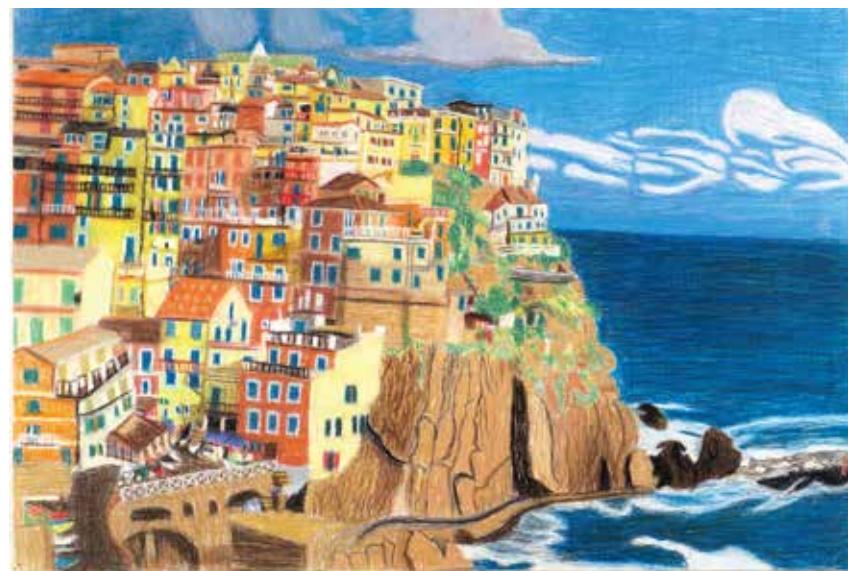
小原 光貴 Mitsutaka Kohara  
「ワンドフル・フルーツ」紙にオイルパステル・水彩絵具  
455mm×380mm



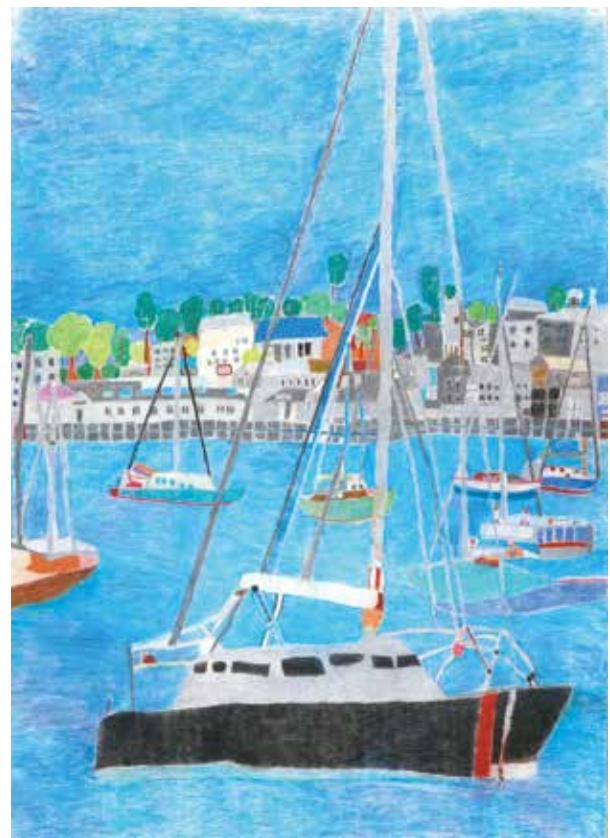
松本 五十美 Isomi Matsumoto 「街の賑わい」紙にマーカー、728mm×1030mm



佐藤 和紀 Kazunori Sato  
「アンコールワット」紙にマーカー・ペン  
728mm×1030mm



増田 恵理 Eri Masuda  
「海のある風景」紙にパステル  
728mm×1030mm



牧野 幸代 Sachiyō Makino  
「ヨットハーバー」紙にパステル  
1030mm×728mm



山口 歩華 Ayuka Yamaguchi  
「らいおん」紙に鉛筆・水彩絵具  
728mm×515mm



戸田 健矢 Kenya Toda  
「手の中に」キャンバスに油彩  
730mm×910mm



安間 佐恵 Sae Anma  
「266 匹の熱帯魚」  
ボードに和紙（ちぎり絵）  
364mm×515mm



水野 恵美 Emi Mizuno  
「街並み」紙に水彩絵具  
728mm×1030mm



八木 優太 Yuta Yagi  
「夕日に染まるモスク」紙にマーカー  
728mm×1030mm



田中 優気 Masaki Tanaka  
「ビバルディ・春・第一楽章」  
紙に和紙（ちぎり絵）  
890mm×1240mm



鈴木 文明 Fumiaki Suzuki  
「かえる」紙にペン・マーカー<sup>1</sup>  
515mm×728mm

ここで御紹介した作品はほんの一部です。  
静岡県下、東部・中部・西部においてそれぞれの地域で作品を今日も精力的に制作している作家がいます。  
その作品数は、2,000作品(2021年11月現在)を超えるものとなっており、さらに増え続けています。  
これからもそんな作家たちの素晴らしい作品を皆様に御紹介できるよう活動を進めて参ります。  
作家から許可を頂いた作品は順次撮影、アーカイブ化し、まちじゅうアートのWEBサイトへ掲載しています。ぜひチェックしてみてください。



まちじゅうアート <http://machiju.art/>

